

## 第2章 アンケート調査から見た労働者の教育・訓練観



## 第2章 アンケート調査から見た労働者の教育・訓練観

### 第1節 アンケート調査結果

#### 1.1. 回答者のプロフィール

本調査に対する回答総数は、2632件であった。このうち、男女の別、年齢、職業、学歴の全てに回答した1527名を集計対象とした。以下に、集計対象1527名のプロフィールを示す。

表1は、回答者を男女別・年代別に整理している。男性は20代・30代、女性は40代・30代に回答者が多い。男女別の回答に年代の影響があることが予想される。

表1 男女別年代別 回答者数 (人)

年代	女性	男性	総数
20未満	7	23	30
20代	85	407	492
30代	102	308	410
40代	131	190	321
50代	91	156	247
60以上	4	23	27
総数	420	1107	1527

表2は、回答者の学歴別の構成を示している。男性は高卒、大卒が多く、女性は高卒、短大卒が多い。構成比で見ると、男性に比べて女性の短大卒が顕著に多いことがわかる。近年女性の4年生大学進学率が高まっているが、男性と女性の年齢構成が約10歳違うことから、女性の4年生大学進学率が高まる以前の層が多いことが予想される。

表2 男女別学歴別 回答者数 (人)

学歴	女性	男性	総数
中卒	3	31	34
高卒	220	560	780
短大・高専卒	104	98	202
大学卒	78	347	425
修士	4	32	36
職業資格	3	5	8
能力開発校経験	8	34	42

能力開発校を経験したものの中には、各学歴を有しているものを含んでいる。

表3は、回答者の職業別の構成を示している。職業の分類は、日本職業分類の大分類によっている。女性は「事務従事者」、「専門的技術的従事者」、「製造制作作業員」の順に多い。男性は「製造制作作業員」、「専門的技術的従事者」、「採掘・建設・労務作業員」、「事務従事者」の順に多い。構成比で見ると女性の「事務従事者」、「男性の製造制作作業員」が、それぞれ大きな比率を占めている。

表3 男女別職業別 回答者数 (人)

職種	女	男	総数
専門的・技術的職業従事者	59	162	221
管理的職業従事者	13	44	57
事務従事者	240	130	370
販売従事者	26	49	75
サービス職業従事者	17	36	53
保安職業従事者	0	9	9
農林漁業作業員	5	8	13
運輸・通信従事者	1	15	16
製造・制作作業員	27	369	396
定置機関運転・建設機械運転・電気作業員	3	69	72
採掘・建設・労務作業員	16	150	166
分類不能の職業	4	1	5
その他	9	65	74
総数	420	1107	1527

### プロフィールのまとめ

以上の結果から、モデル的な回答者像を抽出すると以下のように整理できる。

- ①女性は、30～40歳代、高卒か短大卒の事務従事者である。
- ②男性は、20～30代の、高卒か大学卒で、製造制作作業員、専門的技術的従事者、採掘・建設・労務作業員、事務従事者である。

### 1.2. 問1-1・2-1 現在の仕事・生活に対する各教科の重要度の検討

「図1 各教科の仕事に対する重要さと生活に対する重要さの比較」は、仕事あるいは生活に対して、各教科がどの程度重要と考えているかをグラフ化している。縦軸は、各教科に対する回答の点数を回答者全体で平均した値を示している。なお、「0:学んでいない」と回答した者と無回答者は集計の対象としていない。従って最低値は1、最高値は4である。横軸には、各教科を並べている。が、仕事に対しての重要さが大きかった教科から順に並べている。本節で示す図の教科の並び順は、全て図1に示した順にそろえている。図の■が仕事に対する重要さを示しており、▲が、生活に対する重要さを示している。

なお、各教科に対して重要さを回答されたものだけを集計対象としているので、「福祉」、「看護」、「農業」、「水産」などの教科に対しては、回答者数が少ないことに注意する必要がある。各教科に対する回答者数は、図2、図3に棒グラフで示している。

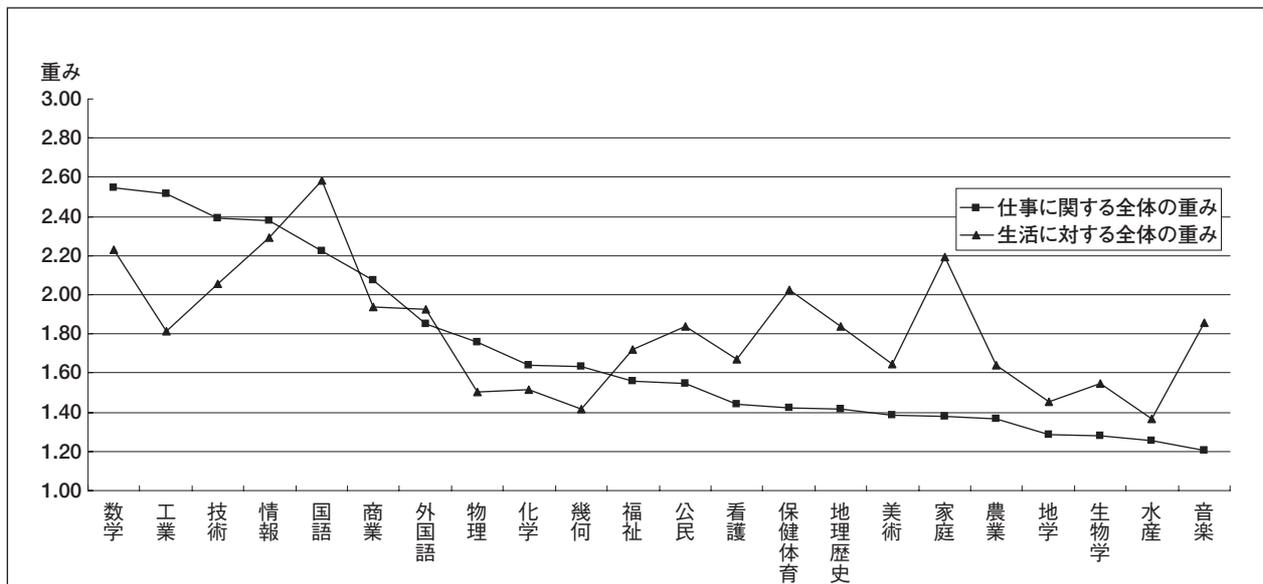


図1 各教科の仕事に対する重要さと生活に対する重要さの比較

#### (1) 全体的な各教科に対する意識の特徴

まず「図1 各教科の仕事に対する重要さと生活に対する重要さの比較」から見てゆく。

仕事に対する重要さを見ると、回答者の構成の中で、「製造制作作業員」、「専門的技術的従事者」、「採掘・建設・労務作業員」が多数を占める背景からか、全ての基礎となる「数学」に続いて、工学分野の基礎と考えられる「工業」、「技術」、「情報」が上位を占めている。他方、多くの人が学習しているが仕事で利用する機会は少ないと思われる「音楽」、「生物学」、「地学」、「家庭」、「美術」は下位にある。また、卒業後の職業との関係が強いと予想される「水産」、「農業」、「看護」が下位にあるのは予想外の結果である。今回の回答者がこれらの職種と関係ない分野の職業に就いていることが影響しているのかもしれない。次に生活に対する重要さを見ると、「国語」が大きく順位を上げて最も重要な教科となる。

この他、「家庭」、「保健体育」、「音楽」、「地理歴史」の順位が大きく上がる。他方、仕事に対して重要であった「工業」は、大きく順位を下げている。また、仕事に対して中位にあった「物理」、「科学」、「幾何」が大きく順位を落としている。

全体に、仕事上は重要とされていた国語以外の教科が順位を下げ、仕事上は下位に位置づけられていた教科が、順位を上げている。この結果、仕事に対する各教科の重要さの差に比べて、生活に対する各教科の重要さの差が小さくなっている。

つまり仕事に対しては、「数学」、「工業」、「技術」などの特定の教科が重要であり、生活に対しては、全ての教科が平均して重要であると回答されている。

(2) 男女の別による各教科に対する意識の特徴

図 2、図 3 は、それぞれ男女別に各教科の仕事に対する重要さと生活に対する重要さを示している。図 2 の仕事に対する重要度を見ると、男性と女性で回答の状況が大きく異なる科目がある。女性が考える「工業」、「技術」、「物理」、「化学」、「幾何」の重要さは、男性に比べて大きく下回っている。逆に「国語」、「商業」、「福祉」、「看護」に対する重要さは男性に比べて女性が重要であると考えている。これは、回答者中の女性の職業として、「事務従事者」の割合が多いことによると考えられる。

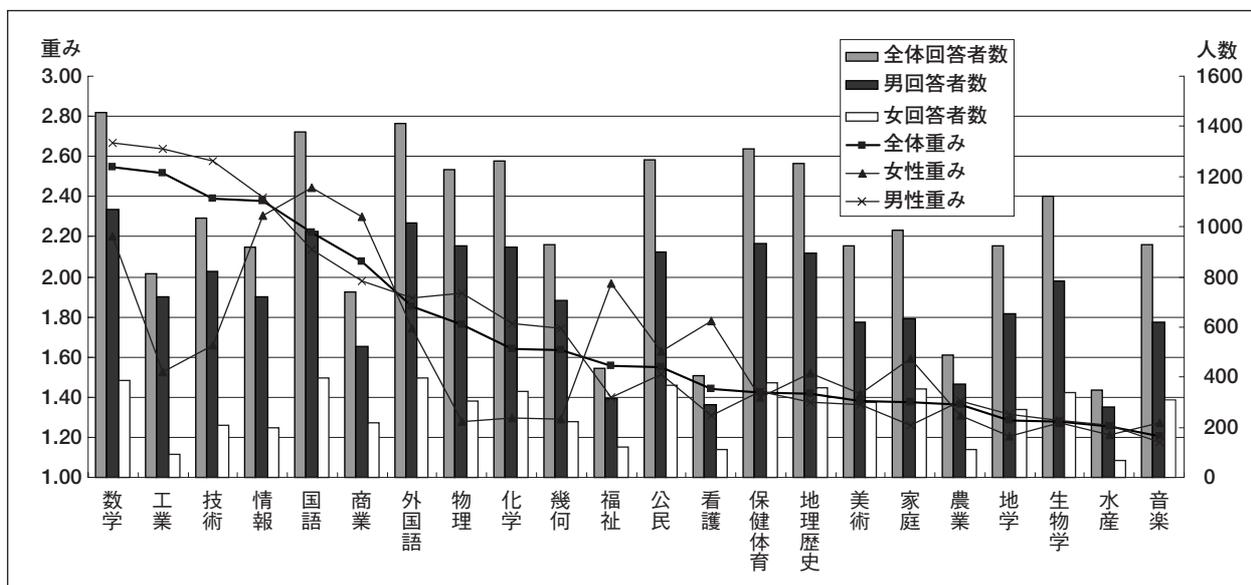


図 2 男女別に見た仕事に対する各教科の重要さ

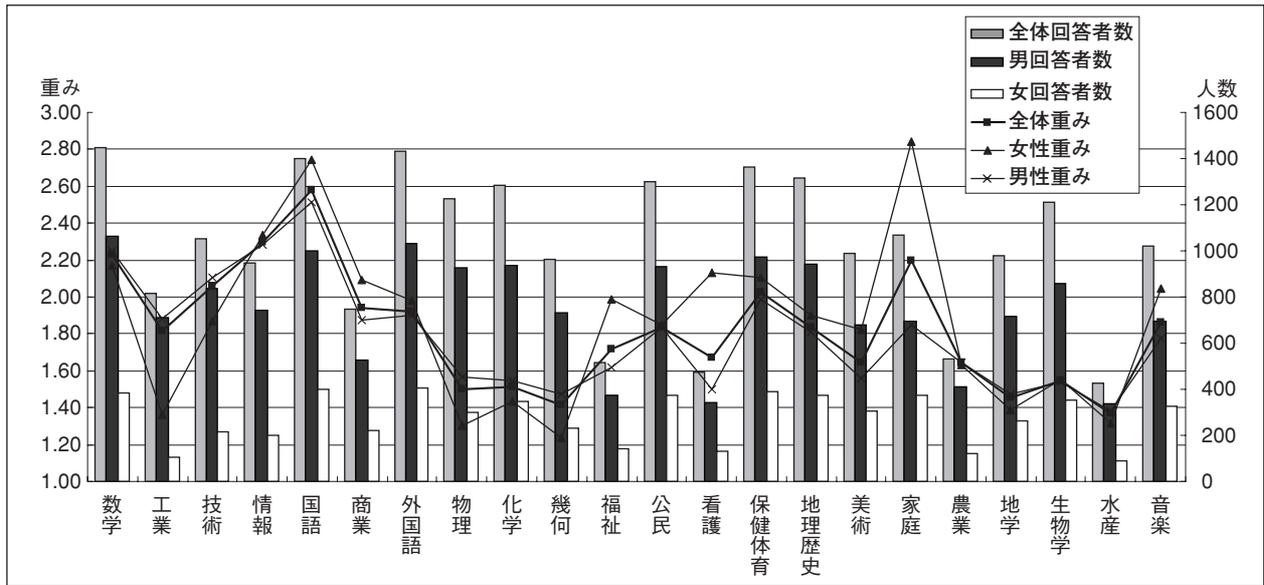


図3 男女別に見た生活に対する各教科の重要さ

図3の生活に対する重要さを見ると、女性が考える「工業」の重要さが小さくなっている。逆に「福祉」、「看護」、「家庭」は女性にとって重要であると考えられている。特に「家庭」の重要さが大きくなっている。この傾向は、家庭生活での男女の役割分担が影響していると考えられる。

(3) 年代別の各教科に対する意識の特徴

図4、図5は、年代別の仕事・生活に対する各科目の重要さを示している。

仕事に対する重要さと生活に対する重要さのいずれも、60歳以上の回答者が特徴的な回答をしている。図4の仕事に対しては、「技術」、「情報」、「公民」、「地理歴史」などが、図5の生活に対しては、「工業」、「技術」、「情報」、「商業」、「外国語」などが他の年代の回答

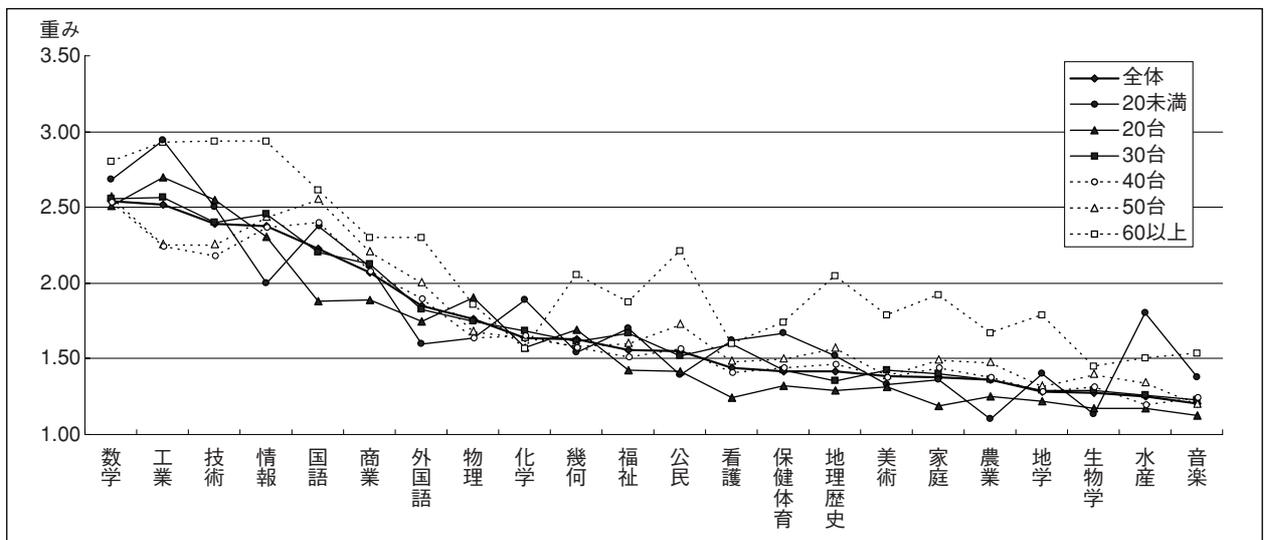


図4 年代別に見た仕事に対する各教科の重要さ

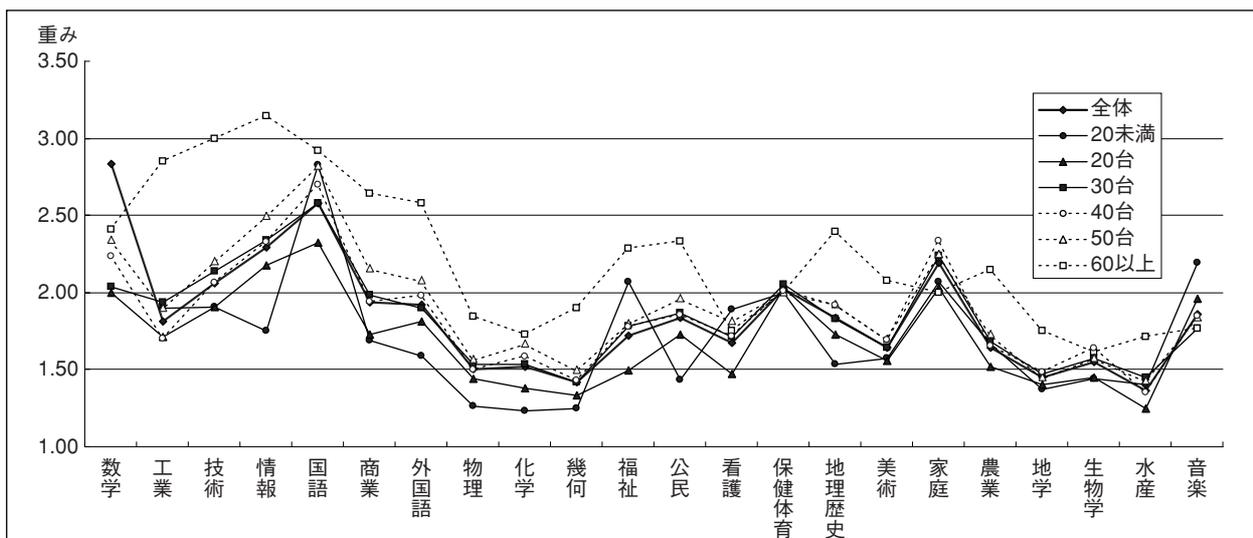


図5 年代別に見た生活に対する各教科の重要さ

より重要である回答されている。これら以外の教科も全体に他の年代に比べて重要と回答されている。60歳以上の回答者数が、男女合計で27名しかいないことから、参考程度に見ることしかできないが、この年代の回答者は、他の年代の回答者に比べて、学校で習得した各教科を仕事・生活の両面で活用していると認識していると考えられる。

(4) 学歴別の各教科に対する意識の特徴

図6、図7は、学歴別の仕事・生活に対する各教科の重要さを示している。

図6については、中卒と修士学歴に特徴的な回答が見られる。中卒者は、「工業」、「情報」、「外国語」、「物理」について他の学歴の回答者に比べて重要さを低く回答している。他方、修士は、これらの教科について高く回答している。また中卒者は、全体に各科目の

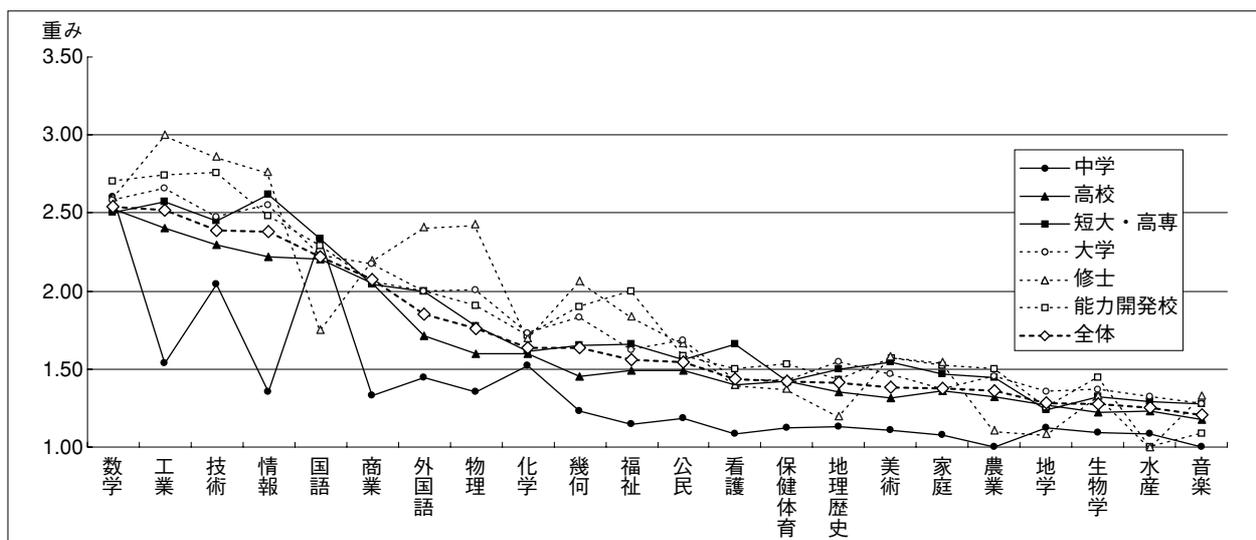


図6 学歴別に見た仕事に対する各教科の重要さ

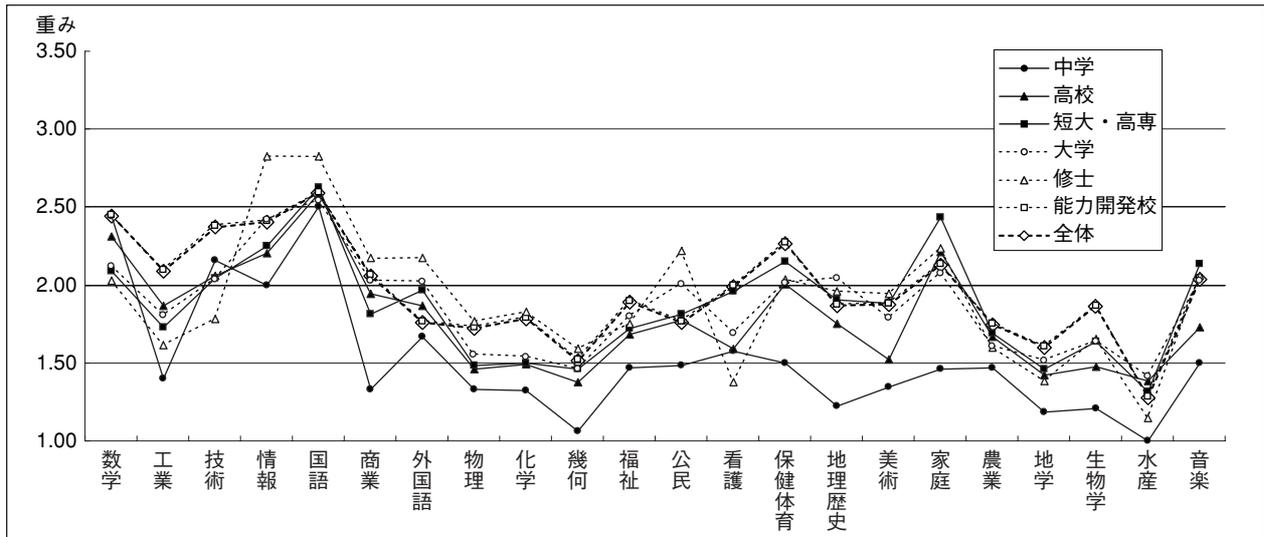


図7 学歴別に見た生活に対する各教科の重要さ

重要さを低く回答している。中卒者にとって、中学までに習得した教科が仕事に活かされたという実感はないようである。中卒者のこのような回答の傾向は、図7の生活に対する重要さの評価でも、顕著に示されている。「工業」、「技術」、「情報」をはじめとして、多くの教科について他の学歴の者に比べて低く評価している。

(5) 職種別の各教科に対する意識の特徴

図8は、職種別の仕事に対する各科目の重要さを示している。ただしここに示した職種は、回答者数が60名程度以上の職種のみである。

職種別に各教科の重要さを見た場合の特徴は、男女別、年齢別など、他の分類に比べて、各教科に対する重要さの評価の差が大きいということである。特に回答の差が大きい教科

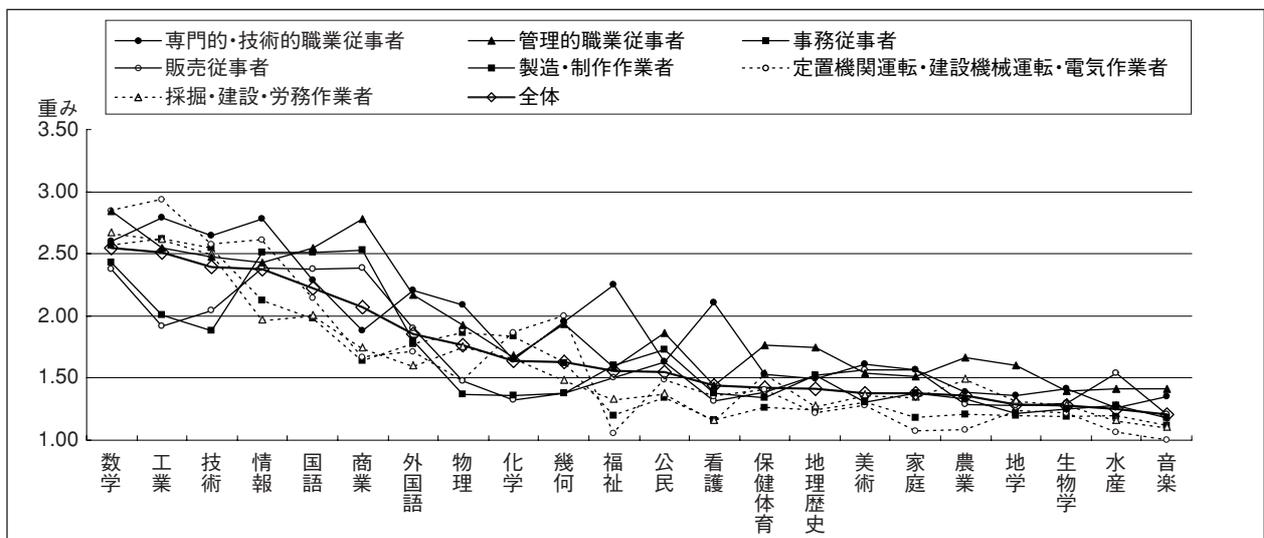


図8 職種別に見た仕事に対する各教科の重要さ

は、「工業」、「技術」、「情報」、「商業」、「福祉」、「看護」である。「工業」、「技術」は、「専門的・技術的職業」、「定置機械運転・建設機械運転・電気作業員」は重要と考え、「販売従事者」、「事務従事者」は重要さが低いと考えている教科である。逆に「情報」、「商業」に対しては、「販売従事者」、「事務従事者」が重要であると回答している。ただ、「情報」に対しては、「専門的・技術的職業」、「定置機械運転・建設機械運転・電気作業員」も重要であると回答している。

他方、「水産」、「農業」、「看護」など、回答者数が少なく専門性も高いと考える教科の重要さが、低く評価されている。

(6) 各教科に対する意識のまとめ

- ① 仕事に対しては、「数学」、「工業」、「技術」などの特定の科目が重要であり、生活に対しては、教科間の評価の差が少ない。
- ② 仕事に対して重要な教科は、「数学」に加えて、男性は「工業」、「技術」、「物理」、「化学」、「幾何」、女性は「国語」、「商業」、「福祉」、「看護」の科目が重要であると考えている。
- ③ 60才以上の回答者は他の年代に比べて、学校で修得した教科を仕事、生活の両面で活用していると認識している。
- ④ 中卒者は他の学歴の回答者に比べて、多くの教科の重要さを低く評価している。
- ⑤ 現在の職業によって、仕事に対して重要であったと考えている教科が異なっている。

### 1.3. 問1-2・2-2 現在の仕事・生活に対する学校での活動の、重要さの検討

#### (1) 男女別の各活動に対する意識の特徴

図9は、学校で行ってきた各活動が仕事や生活にどの程度重要であったかを示している。折れ線グラフは、各活動の重要さを図2と同様に回答を数値化して示している。最低値が1であり、最高値が4である。無回答者は、集計の対象としていない。棒グラフは、各項目に対する回答者数を示している。図9からは、各活動に対する重要度について、男女別の違いは読みとれない。

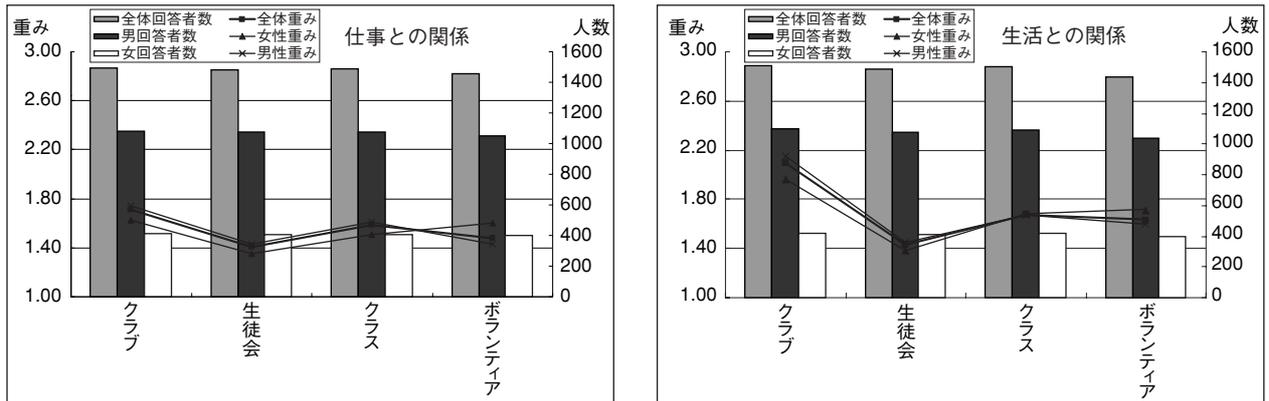


図9 学校での活動の仕事、生活に対する重要さ

#### (2) 各活動の仕事と生活に対する意識の特徴

図10は、各活動の仕事に対する重要さと生活に対する重要さを比較している。これによると、「クラブ活動」が仕事に対してより生活に対して重要であったと回答されている。

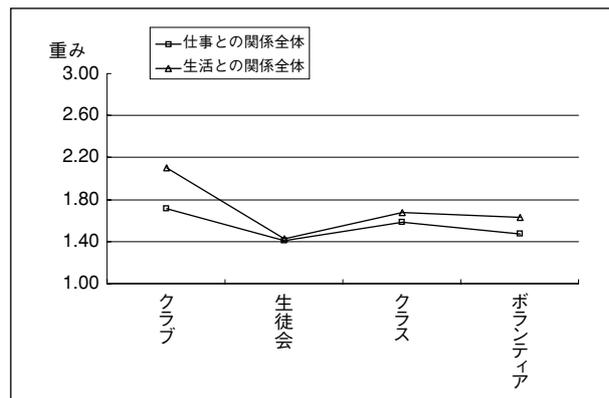


図10 学校での活動の仕事、生活に対する重要さ

#### (3) 年代別の各活動に対する意識の特徴

図11は、各活動が仕事や生活にどの程度重要であったかを年代別のグループに分けて示している。これによると、60代以上の回答に特徴が見られる。特に仕事と生活のいずれに

対しても、「生徒会活動」が重要であったと回答している。また、他の活動についても、他の年代の回答に比べ、重要であると回答されている。この各活動が重要であるとする回答の傾向は、年代が高くなるにしたがって、徐々に重要であると回答されるのではなく、60才以上のグループに見られる特徴である。このことから、60才以上のグループが参加してきた活動が、それ以下の年代が参加してきた活動と異なったものであったと予想される。

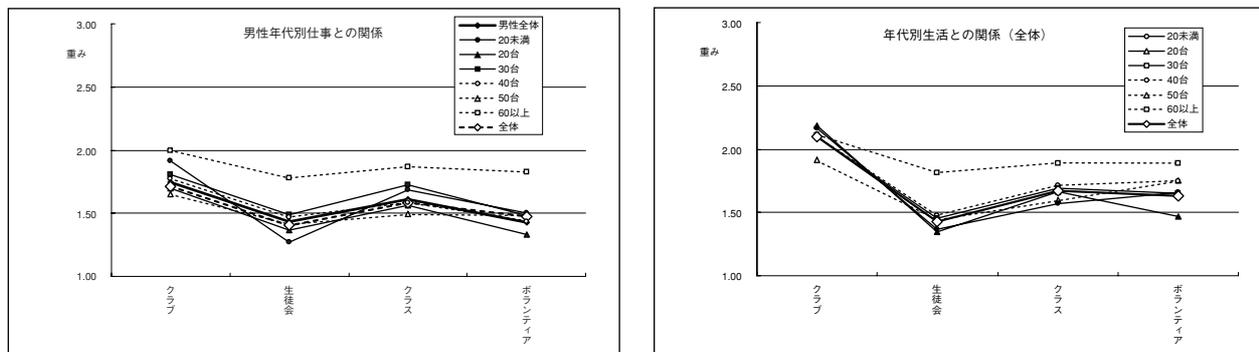


図11 年代別に見た学校での活動の仕事、生活に対する重要さ

(4) 学歴別の各活動に対する意識の特徴

図 12 学歴別に見た学校での活動の仕事、生活に対する重要さ

図 12 は、各活動が仕事や生活にどの程度重要であったかを学歴別に示している。これによると中卒者は、仕事に対する重要さと生活に対する重要さのいずれも、他の学歴のものに比べてすべての活動に対して低く回答している。逆に生活に対しての重要さは、大卒、修士と学歴が高まるほど「クラブ活動」、「クラス活動」が重要であると回答している。

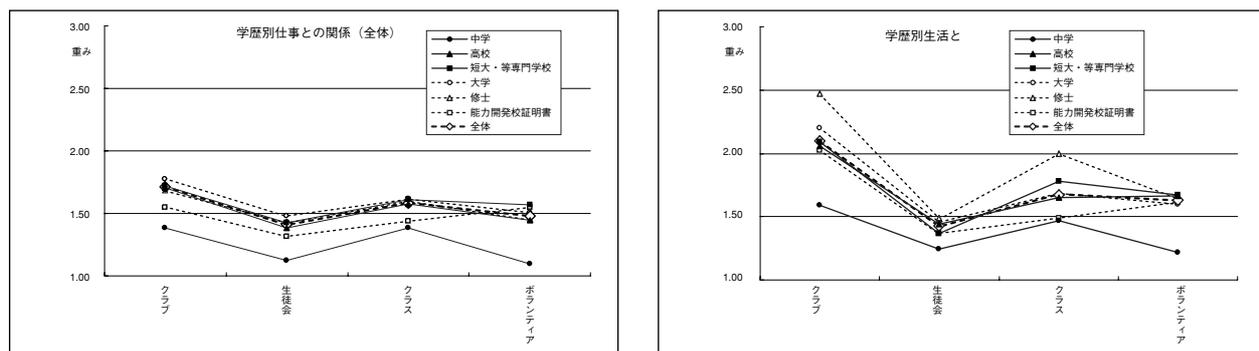


図12 学歴別に見た学校での活動の仕事、生活に対する重要さ

(5) 各活動に対する意識のまとめ

- ① 「クラブ活動」が仕事に対するより生活に対して重要であると評価している以外は、各活動について同程度の評価をしている。
- ② 60代以上の回答者は、「生徒会活動」を中心として他の年代の回答者に比べて重要であ

ると評価している。

- ③ 中卒者は、他の学歴のものに比べてすべての活動に対して重要さを低く評価しており、大卒、修士は、生活に対して「クラブ活動」、「クラス活動」が重要であると評価している。

#### 1.4. 問1-3・2-3 学校での経験の現在の仕事・生活に対する重要さの検討

図13は、学校時代のいくつかの経験が、仕事や生活にどの程度重要であったかを男女別に示している。棒グラフは回答者数を示しており、折れ線グラフが各経験の重要さを示している。この問への無回答者は、集計の対象としていない。

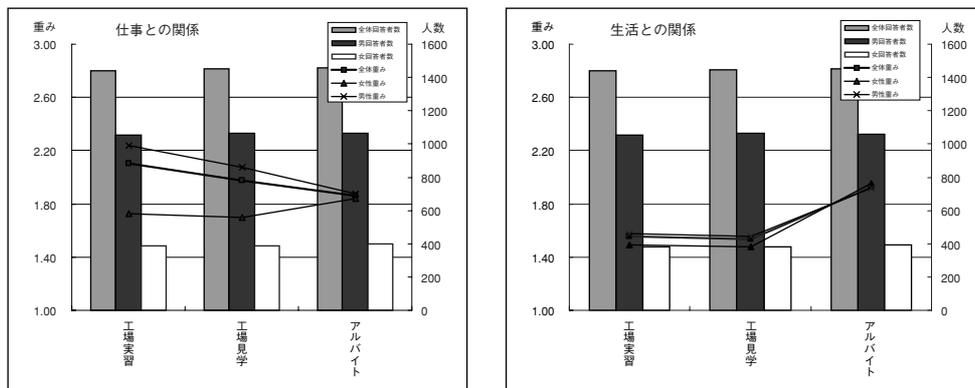


図13 学校での経験の仕事、生活に対する重要さ

##### (1) 男女別の各経験に対する意識の特徴

図13から、仕事に対する学校での経験が男女の間で差があることがわかる。男性にとっては、「工場実習」や「工場見学」が仕事に対して重要であると考えられているが、女性にとってはそうでもないようである。一般に「工場実習」や「工場見学」は、製造職場を対象にしていると推察されるが、今回の、女性の回答者の多くを「事務従事者」が占めていることが影響しているかもしれない。生活に対しては、男女間に大きな違いは見られない。

##### (2) 仕事と生活に対する各経験の意識の特徴

図14は、全回答者の仕事に対する重要さと生活に対する重要さの意識の違いを比較している。「工場実習」、「工場見学」の経験が、生活に対するより、仕事に対して重要であったと回答している。

アルバイトは、仕事との関係よりも生活との関係で重要と考えられているようである。

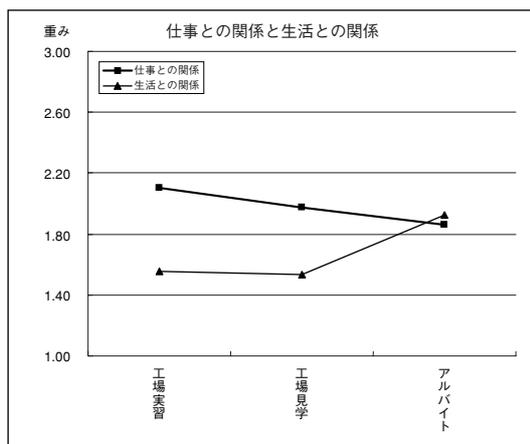


図14 学校での経験の仕事、生活に対する重要さの比較

(3) 年代別の各経験に対する意識の特徴

図 15 は、年代別の各経験に対する意識を示している。仕事に対しては年代別に多少の回答のばらつきがみられるが、顕著な違いではない。20才未満の回答者が工場実習を重要と回答していることと、30代の回答者がアルバイトを重要と回答していることが特徴である。生活に対しては、40代以上の年齢の高い層が、他の年代に比べて、アルバイトが重要でないとして回答している。逆に、若い年代ほど、アルバイトを重視している。この傾向は図 16 に示す女性の年代別の回答で、女性の30代より若い年代がアルバイトを重要視している結果として、顕著に見ることができる。

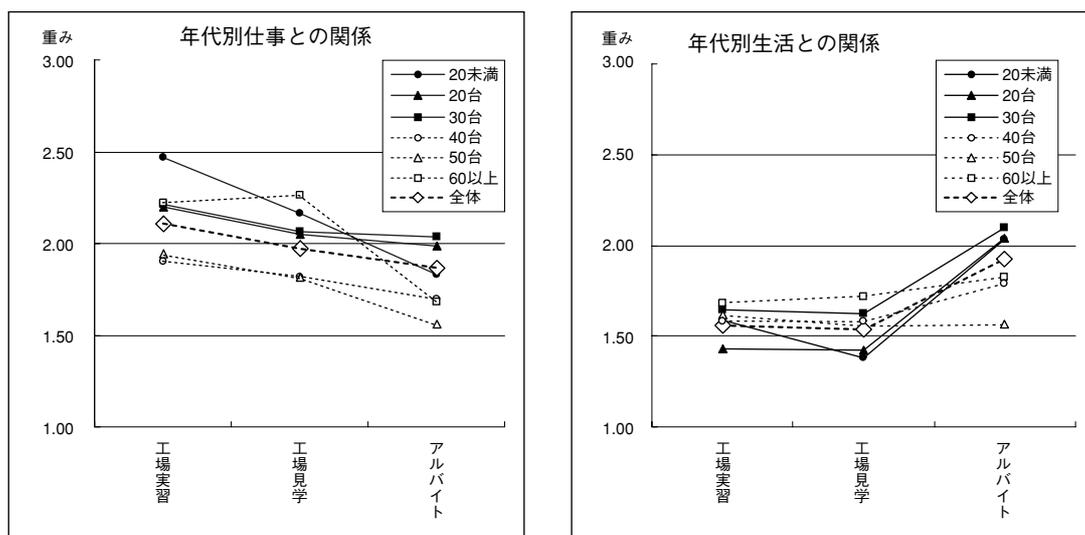


図15 年齢別に見た学校での経験の仕事、生活に対する重要さ

(4) 学校での経験の仕事と生活への重要さのまとめ

- ① 工場実習、工場見学は、生活に対するより、仕事に対して重要視している。
- ② 仕事に対する工場実習、工場見学の重要さは、女性より男性が重要視している。
- ③ 生活に対するアルバイトの重要さは、年代により重要さが異なり、特に若年の女性が重要視しており、50代以上は重要視していない。

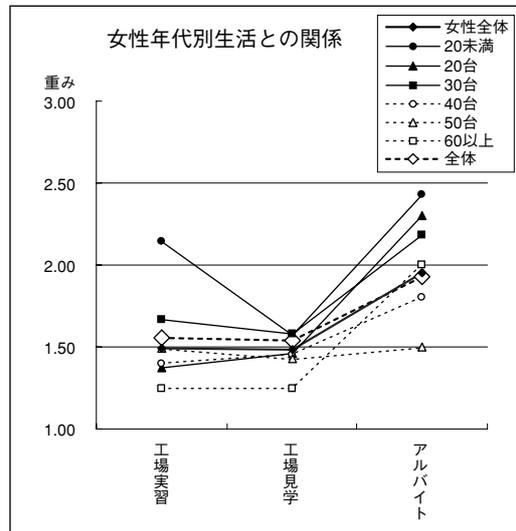


図16 女性、年代別に見た学校での経験の生活に対する重要さ

1.5. 問1-4・2-4 現在の仕事・生活に対する学校生活の重要さの検討

図17は、学校でのさまざまな学習、活動、経験が仕事、生活に対して重要であった順に順位を回答してもらい、順位毎に回答数を積み上げている。縦軸は回答者数を示している。集計は、この項目に回答した全回答者を対象としている。

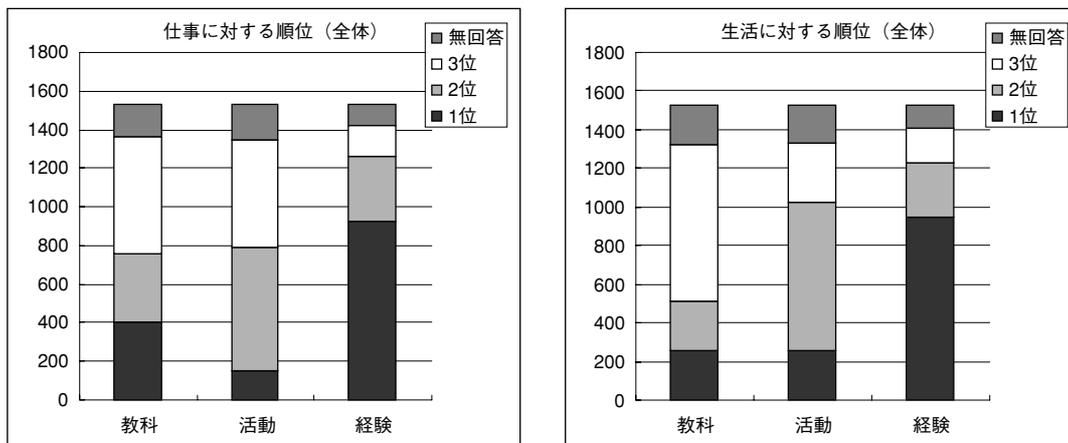


図17 学校でのさまざまな学習、活動、経験の仕事、生活に対する重要さの順位

### (1) 各経験に対する全回答者の意識の特徴

図 17によれば、仕事に対して、生活に対してのいずれも、最も重要（重要さを1位と回答）であった活動は、「さまざまな経験」であるとしている。以下、「さまざまな教科」、「さまざまな活動」の順になっている。また、第2位と回答されたものまでを含めると、「経験」、「活動」、「教科」の順になる。ただ、仕事に対しては、「教科」と「活動」の順位は拮抗している。

つまり、学校生活で仕事や生活に最も役立ったのは、まず「経験」である。そして、次に重要なのは、「教科」なのだけれど、「教科」を第3位とする回答者も多く、教科に対する評価は別れているのである。

### (2) 各経験に対する回答者群別の意識の特徴

1位と回答した回答者数で見ると「経験」→「教科」→「活動」、2位までの回答者数で見ると「経験」→「活動」→「教科」の順になる傾向は、多くの回答者群で見られる。特に、「経験」が最も重要であるという傾向は、どの回答者群でも変わらない。

しかし、学歴別に見ると、この傾向に違いが見られる。

図 18は、仕事に対する順位を、学歴別に示している。2位までで見ると、一般的な傾向である「経験」→「活動」→「教科」の順であるのは、「高卒者」、「短大・高等専門学校卒」であることがわかる。「中卒」、「大卒」、「修士」、「能力開発校経験者」のいずれも、「経験」→「教科」→「活動」の順になっている。一般に、卒業後に就職する職種が絞られてくる「大卒」、「修士」、「能力開発校経験者」にとって、「教科」の重要性が高いと認識されていると見てよいだろう。

また職種別に見ると、「専門的・技術的職業従事者」、「運輸・通信従事者」、「製造・制作作業員」、「定置機関運転・建設機械運転・電気作業員」には、「教科」を重要視する傾向が見られる。図 19に、「管理的作業員」、「事務作業従事者」、「専門的・技術的職業従事者」、「製造・制作作業員」の回答を示す。

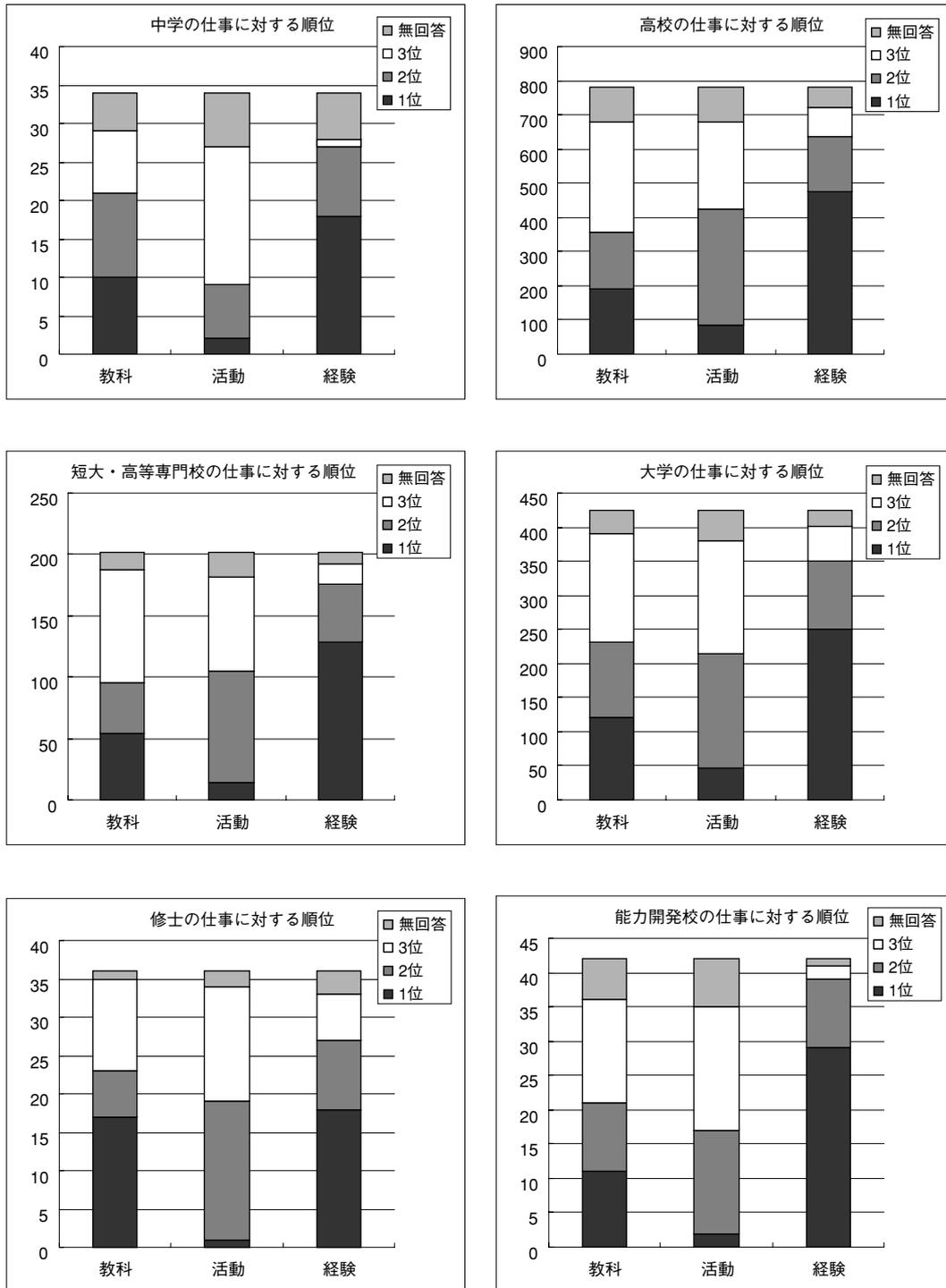


図18 学歴別に見た学校でのさまざまな学習、活動、経験の仕事、生活に対する重要さの順位

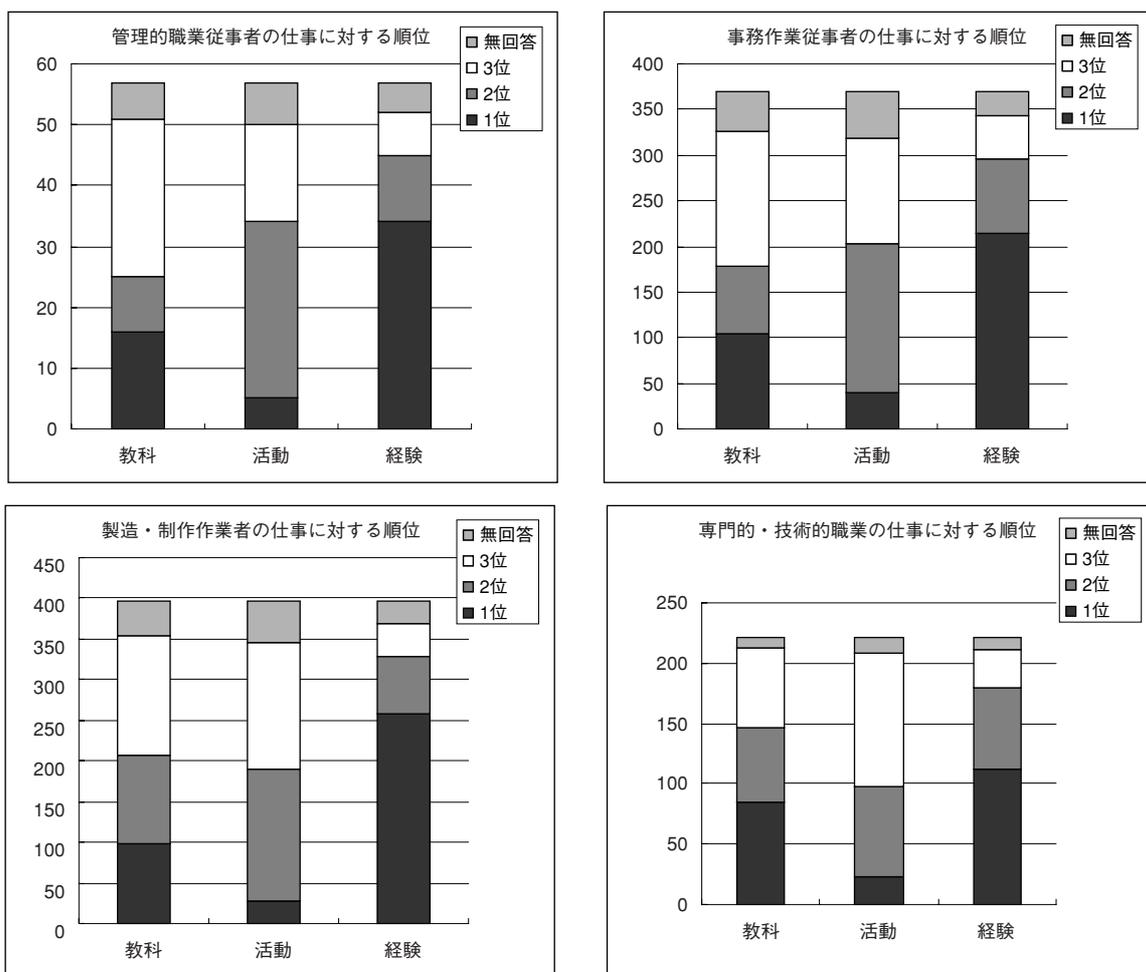


図19 職種別に見た学校でのさまざまな学習、活動、経験の仕事、生活に対する重要さの順位

- (3) 学校時代の様々な「教科」、「活動」、「経験」の、仕事と生活への重要さのまとめ
- ① 仕事や生活に対して最も重要な学校生活の中身は、一般に「さまざまな経験」である
  - ② 学校生活の中身を重要な順に並べると、一般に「経験」→「活動」→「教科」であるが、卒業後の就職先の専門性に近い内容との関係が強いと考えられる学校を卒業した回答者にとっては、「経験」→「教科」→「活動」となり、「教科」を重要視する傾向がある。
  - ③ 「専門的・技術的職業従事者」、「運輸・通信従事者」、「製造・制作作業者」、「定置機関運転・建設機械運転・電気作業者」には、「教科」を重要視する傾向が見られる。

### 1.6. 問1-5 各教育訓練の現在の仕事に対する重要さの検討

図20は、それまでに経験した教育訓練について、仕事に対して重要な順に順位を回答してもらい、順位毎に回答者数を積み上げてグラフ化したものである。縦軸は回答者数を示している。その項目に回答した者全てを集計の対象としている。

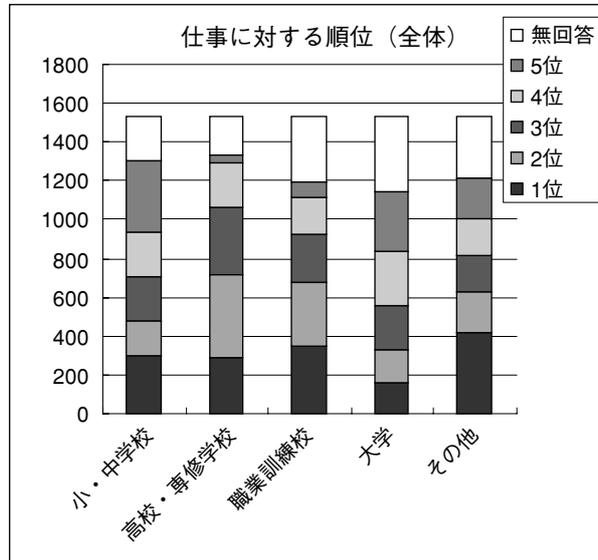


図20 教育訓練の仕事に対する重要さの順位

#### (1) 各教育訓練に対する全回答者の意識の特徴

図20によれば、最も重要（重要さを1位と回答）と考えられている教育訓練は、「その他」（OJTなど企業が行う教育訓練）であり、次いで、「職業訓練校」、「小中学校」、「高校」、「大学」の順である。

2位までの回答を含めると、「高校」、「職業訓練校」、「その他」、「小中学校」、「大学」の順になり、「高校」の順位が上がっている。いずれにしても、「大学」の順位が最低位であることは特徴的である。「高校」や「大学」、「職業訓練校」に対する順位付けは、その教育訓練を受けていない者が予想して低位をつけている場合もあるので、その解釈は慎重にすべきであるが、一つの特徴といえよう。

#### (4) 学歴別の各教育訓練に対する意識の特徴

図21は、学歴別の各教育訓練に対する意識を示している。これによると、「中卒者」や「高卒者」は「大学」の教育訓練が仕事に対して重要であるとは考えていない。これは、「中卒者」、「高卒者」が現在就いている仕事に対して、「大学」の教育は必要でないと見ている場合と、単に大学の教育は職業には重要でないと考えている場合があろう。逆に「大学卒」や「修士」は、「大学」での教育訓練が重要であると回答している。特に「修士」は、「その他」の教育訓練より重要であると回答している。つまり、学ぶ内容が卒業後の職業に

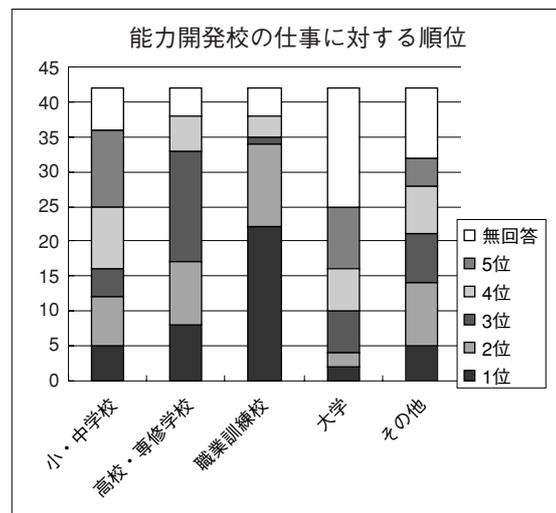
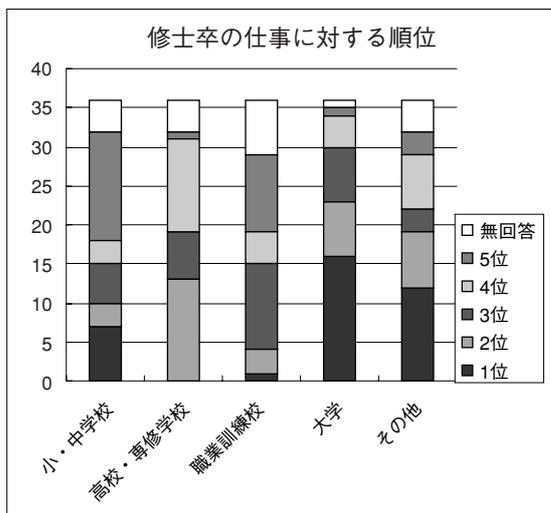
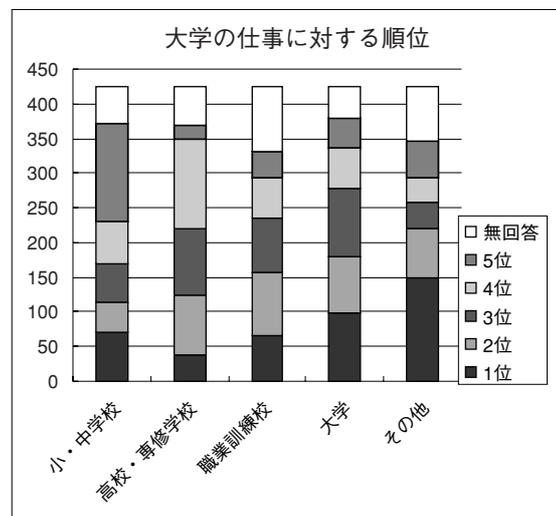
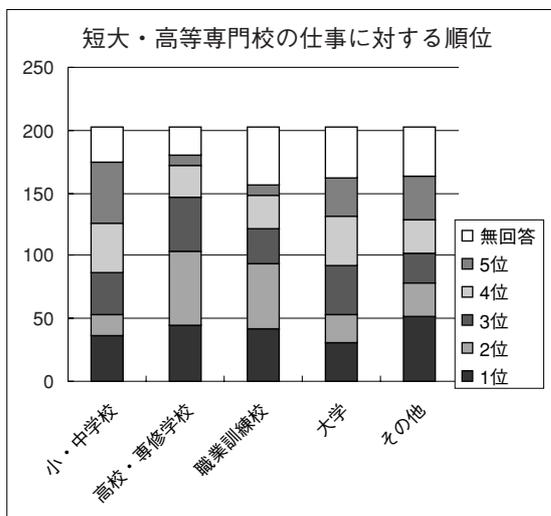
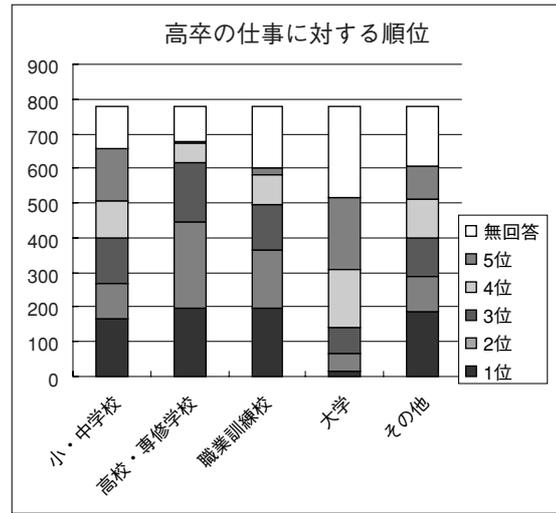
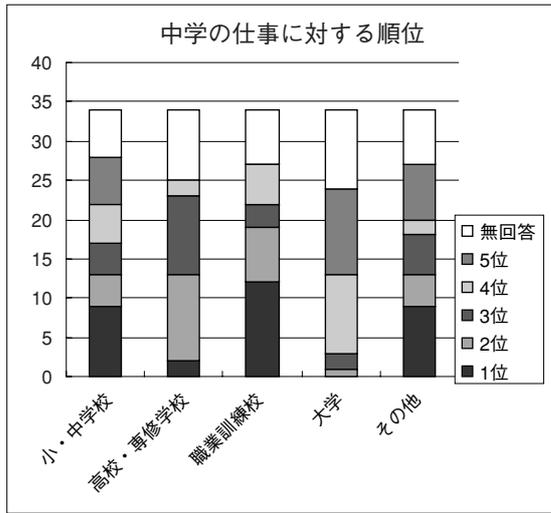


図21 学歴別に見た教育訓練の仕事重要さの順位

近い内容であるほど、学校で学んだ内容が重要であると回答しているのである。他方、「中卒」、「高卒」、「短大・高等専門学校卒」は、「その他」の教育訓練とそれまでに受けてきた教育訓練が同程度に重要であると回答しているのに対し、「大学卒」は、大学の教育訓練より「その他」の教育訓練が重要であると回答している。つまり「大学卒」は、大学の教育訓練が重要であると回答しつつも、それより、「その他」の教育訓練が重要であると回答しているのである。

#### (5) 各教育訓練と仕事のまとめ

- ① 一般に、「その他」の教育訓練（OJT等企業が行う教育訓練）、「職業訓練」が仕事に対して重要であると考えられている。
- ② 一般に、それまでに受けてきた教育訓練が「その他」の教育訓練と同程度に重要であると考えられている。
- ③ 「修士」、「職業能力開発校経験者」は、「その他」の教育訓練より、それまでに受けてきた教育訓練が重要であると考えており、逆に「大卒」は、「大学」での教育より「その他」の教育訓練が重要であると考えている。

## 2. 労働者の教育に対する意識の特徴

今回の回答者に共通しているのは、学校教育の中で重要なのは、「教科」ではなく、各種の「経験」や「活動」だということである。←図17

つまり、日本人労働者にとって学校は、「教科」を学ぶ場所ではあるが、それ以上に「教科」以外の「経験」や「活動」による学習を積む場所であると考えられているのである。

ただ「教科」に対する考え方には、いくつかの特徴が見られた。

以下、回答者群による「教科」に対する評価の違いを見ることで、日本人労働者の教育に対する意識の特徴を整理していきたい。

まず、教科の中で重要と考えられる教科とその他の教科の違いについてである。

一般に、生活に対して重要と考えられている教科は他の教科と重要と考えられる程度の差は大きくない。←図1

他方、仕事に対しては、重要と考えられている教科とそれ以外の教科との差が大きい。ある人物にとって、特定の教科が仕事に対する意味をもっており、それ以外の教科は生活に対して意味を持っているととらえられていることを示している。つまり日本人にとって、それぞれの教科が、仕事、生活のいずれかに役立つものであると意識されているのである。

その中で、男女の仕事に対する重要な教科が異なっている様子が見られる。「数学」、「国語」、「情報」など、どの仕事に就くにしても必要になる教科のほかに、男性は「技術」、

「工業」、女性は「商業」が重要であるとしている。←図 2

このような傾向は、今回の回答者の、「女性は、30～40歳代、高卒か短大卒の事務従事者」、「男性は、20～30代の、高卒か大学卒で、製造制作作業員、専門的技術的従事者、採掘・建設・労務作業員、事務従事者である」というプロフィールの違いによるものと考えられる。

つまり卒業後の仕事との関わりで、「教科」に対する評価が変わっているのである。

次に特徴的なのは、年代による各教科に対する評価の違いである。60歳以上の年代は、他の年代比べて、各教科が仕事に対して重要であると回答している。←図 4

60歳以上の年代は各教科に対する評価以外にも、学校での活動の仕事に対する重要さ図 11でも、他の年代に比べて重要であると回答しており、この年代に対する学校の重要さが他の年代に比べて特別なものであったことが伺われる。

学校生活での各種の経験に対する学歴別・職種別の特徴は、次のようなものであった。

「高卒」、「短大・専門校卒」にとって、仕事に対する「教科」の重要性は、「中卒」、「大卒」、「修士」、「能力開発校経験者」に比べて低いものであった。←図 18

日本の労働者としてもっとも比率が高いと思われる「高卒」、「短大・専門校卒」にとって、「教科」の重要性が低いものであることは、一種の驚きである。

これは、中卒者の特徴的な回答と関係しているかもしれない。中卒者は、他の学歴のものとは比べて各教科は仕事上も生活上も重要さが低いと回答している。←図 6・図 7 その一方で、他の学歴のものとは比べて、他の経験に比べて「教科」が重要であると回答しているのである。←図 18

つまり他の学歴のものより「教科」が重要と回答しているにもかかわらず、その内容は、仕事にも生活にも役立っているという実感が無いのである。

また、職種別では「管理的職業従事者」「事務作業従事者」にとっての仕事に対する「教科」の重要性は、「製造・製作作業員」、「専門的・技術的職業」に比べて低いものであった。

このような、教科に対する重要さの評価を図示すると、図 22 のように示せる。このように見ると、高等教育経験者と思われる、「専門的、技術的職業」に従事する者が「教科」を「管理的職業」に従事する者が「活動や・経験」を指向していることがわかる。また中等教育経験者と思われる、「製造・製作作業員」が教科を、「事務作業従事者」が「活動・経験」を指向していることがわかる。

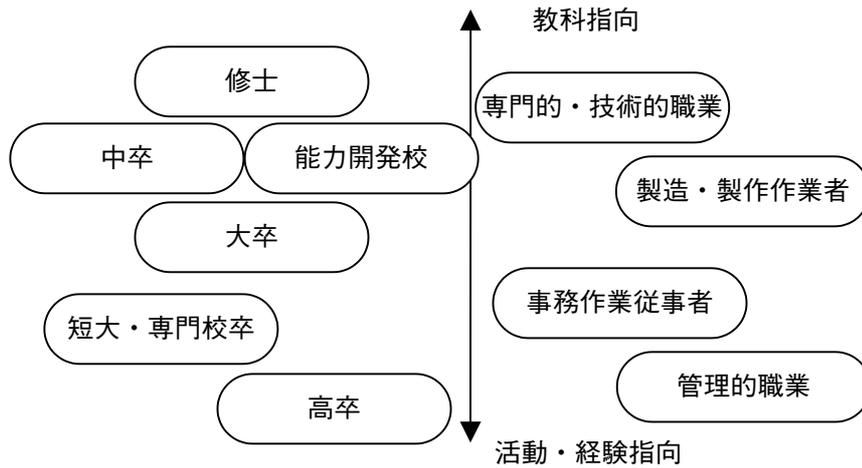


図22 各回答者群の教科と他の活動に対する評価のプロフィール

以上の日本人労働者に対する教育観を整理すると次のように整理できる。

- ① 60歳を境としてその前後で、教育に対する意識が変化した。
- ② 仕事に対して有効であると教科と生活に対して有効である教科とがある。
- ③ 専門的・技術的な分野で仕事をしているものと、事務的な分野で仕事をしているものとの間で、学校が異なる働きをしている。
- ④ 高学歴者は学校を重要であると認識しているが、中卒者はそう考えていない。

## 第2節 記述方式に見る労働者の教育・訓練観

ここではアンケートの中で記述方式により求め問3より問6までの回答結果の分析を行う。

### 2.1. 問3 学校で学んでおけば良かった「教科目」

まず、この問の分析に当たり、職業を「無職」または「失業中」と答えた人を除外した。そのため分析の対象者は2,390人である。

また、分析の結果は「学校時代に学習すべきだった」内容を答えた人の比率で現わした。

さらに、回答は自由記述のため、極めて多様な言葉で記されているが分析者が次のように分類して集計した。

以下の図表に標記されている項目は、表4のゴシック体で現した用語であり、それらの用語を含むものとして解釈いただきたい。

また、以下の分析結果図の「その他」は表7の「その他」のみであり、他の項目を含めていない。

表4 問3に記述された学習内容の分類表

1	勉強
2	英語・英会話
3	英語以外の様々な教科目
4	社会体験・ボランティア等様々な経験・
5	労働・アルバイト
6	スポーツ・クラブ活動
7	人間関係
8	道徳
9	国民としての自覚
10	レクリエーション
11	精神修養
12	技術
13	進路指導
14	一般常識
51	ワープロ・パソコン・情報処理等
52	その他 現在の仕事に <b>関係する専門分野</b> 建築・インテリア・土木・造園・看護・食品・家政学・商業簿記・機械・電気等
61	現在の仕事に直接関係しない <b>非専門分野</b> 心理学・教育学・法律・経済・社会・行政・福祉・英語・外国語・音楽・倫理・ 人生論・英語以外の外国語等
90	その他

回答を記述した人を性別に見ると、女性は約65%、男性は60%が記述しており、女性の割合が高くなっている。

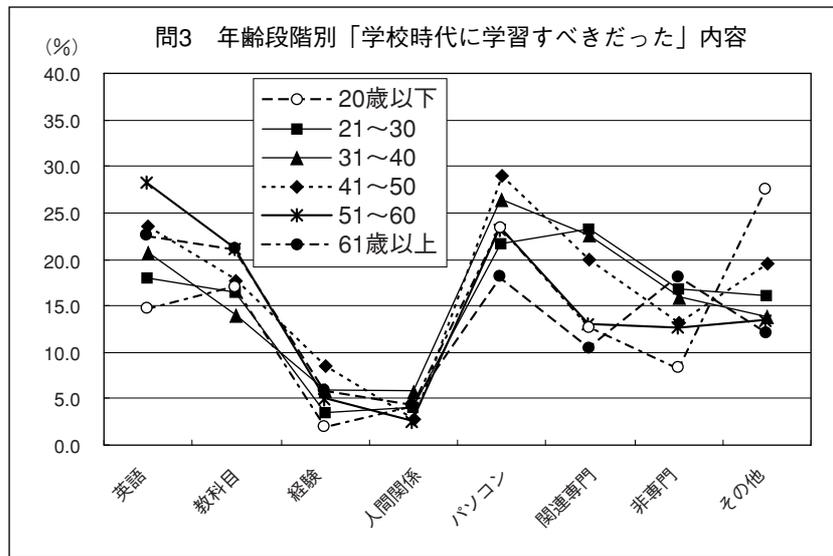


図23 年齢段階別に見た「学校で学習すべきだった内容」

記述された内容を表4のように分類して年齢段階別に見ると図23のようになる。

年齢に限らず最も多かったのは時代を反映して、ワープロ・パソコン等の情報処理に関する内容であった。英語等とパソコン等および関連専門において年齢段階で大きな差異が認められる。次いで英語、仕事に関係する専門という順である。それぞれの期待内容は、若干ではあるが年齢階層により要求率に差異が認められる。

職業別見ると、特に管理的職務に就いている人が高いのが特徴である。

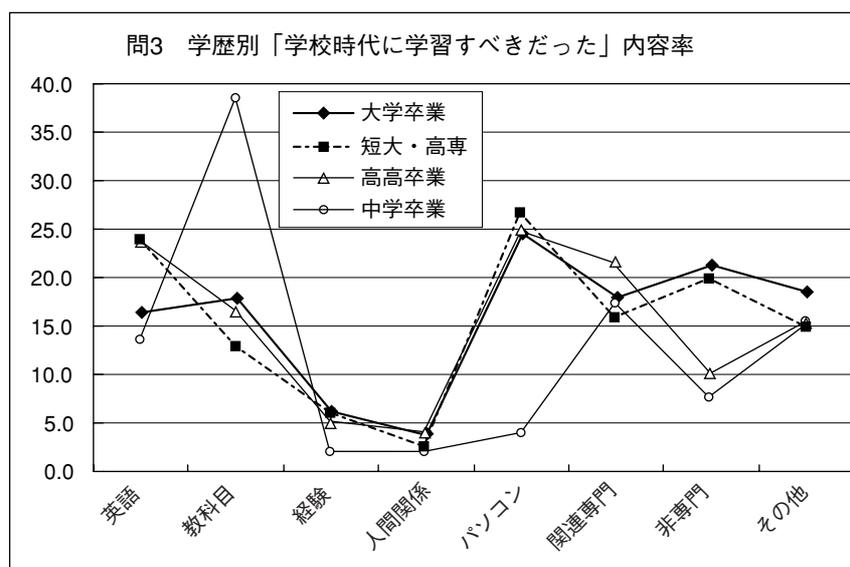


図24 学歴別に見た「学校で学習すべきだった内容」

ここでは中学校卒業者が特徴ある回答をしている。特に「様々な教科目の学習」が極めて高くなっている。そしてパソコン関係では逆に低くなっている。非専門的内容については高校卒業者とともに低く回答している。

以上から、学校時代に学習しておけば良かったとする内容は、情報関係と、仕事に関する専門的内容についてが、いずれの分析軸においても高くなっている事が分かる。

## 2.2. 問4 あなたにとって「教育」とは何でしょうか？

この問は、回答者が普段に思っている「教育」に対する思いを、自分の言葉で記述して貰い、アンケートという質問者の意図を極力避けるために記述方式として設定された。

したがって、この回答を分析することは困難が伴ったが、言葉を5W1Hのどれに相当するかを分類し、その一覧表を作成することから作業が始まった。ただ、記述された言葉は膨大であり、「短い文章で書いて下さい」とのお願いは記されていても、「教育」への思いを書き出すと短い言葉では終わらない。そのような場合はキーワードを上記の5W1Hのいずれになるか当てはめて分析した。

また、記述は制限していないため、「教育」の意味についての文章を複数書いた回答者もいるが、それらも全て言葉を分類して集計した。従って言葉の数は重複記述の集積と言うことになる。

表5 「問4 貴方にとっての教育の意味」

いつ	どこで	誰が		どのような		なにを		どのように		どうする			
		自分	276	人間としての	363	学問・知識・情報・漢字・文章	408	経験を通して	72				
一生・人生	109	社会・世界	119	自分	276	人間としての	363	学問・知識・情報・漢字・文章	408	経験を通して	72	学ぶ・覚える・知る・勉強する・頭を働かす	609
常に	35	場所	36	先生	12	必要な・重要な	295	(?) 基本的なこと	280	ともに・集団で	24	形成する・身につける・得る・持つ・受ける	492
将来・未来	29	職場	30	国民	10	社会にでる	154	自己のこと・身体	236	専門的に	24	生活する・生きる	283
子供に対して	21	学校	26	社会	9	多くの・広い	107	もの(教育のこと)	233	一部分・一旦	21	教える	205
大人	14	家庭	24	親が	9	最低限の・していいけない	93	能力・技能	180	きちんと	20	向上する・鍛える・増す	199
成長に伴って	13	日常	20	先人	9	大切な	54	一般常識・教養・文化	141	やる気によって	19	伸ばす	124
その後・今後	13	地域	6	生徒	7	個々の	45	生活上の・態度・しつけ	114	義務的に	19	育てる	122
現在	10	国	5	親以外	1	あたらしい	44	精神・心	100	全て	11	役立つ	106
年齢に応じて	6					より良い	32	方法・手段	99	自由に	10	準備する・基礎になる	105
必要に応じて	4					仕事を昇つける	30	個性・適正・興味・楽しみ	91	活用して	9	見つける	82
最終的に	3					団体生活での	24	社会のルール・義務	85	一人で	7	作る	62
						教科・教材	20	生きるすべ・指針	80	直接	7	考える	62
						入口の・一步の	20	人付き合い・対話	78	より深く	7	行動する・活動する	43
						真の	17	他人のこと	45	必要な者が	6	豊にする・充実する	36
						すすんで	15	可能性・創造性・光	40	一応・普通	6	決める・判断する・解決する	36
						強制的に	14	期間・時間	27	再び	6	引き継ぐ	33
						困難な・疑問な	13	友人	20	効率よく	5	接する・ふれあう	30
						将来の	12	物事	18	円満に	5	大切に	27
						高度な	7	幅	14	工夫して	5	目的(教育の)	25
						なにか	7	問題	12	論理的に	5	応用する・適応する	22
						分かり易い	6	将来のこと	8	必ず	4	助ける	15
その他	1	その他	3	その他	1	その他	51	その他	105	その他	28	その他	120
総計	258		269		334		1423		2414		320		2838

まず、言葉を5W1Hに分類した結果を示したのが、表5である。

この結果から、それぞれの「格」別に最も多く記述された言葉を並べると次のような意味になる。

「教育」とは「人生を通じて社会の中で自分が人間としての知識を経験を通して学ぶことである。」ということになる。

特に最後の「どうする」の「学ぶこと」に次いで多かったのは「形成する・身につける」等の言葉であり、いずれにしても、これらは自分自身が知識を習得するという能動的な姿勢を示していることが分かる。

また、第三者を「教える」とした回答も190名あるが、上の回答者等と比較すると大幅に少ないことが分かる。つまり、「教育」とは自己の能動的な発達を意味した言葉と理解されており、他からの指導されての成長と言うような受動的な意味としては捉えられていないことが分かる。

このことは、分類表の特徴として教師等の「第三者」から「教えて貰うこと」と言うような受動的な言葉がほとんど見あたらないこととも符合している。「誰が」の中に「先生」が有るがわずかに11名の記述であり、この用語を書いた人が「育てる」という言葉と連動して記述した人達だろうと言うことが予想される。

このように、「教育」というものに対する労働者・国民の理解は、自分自身の成長のための活動である、と理解されていると言えよう。より強調すると、「教育」を労働者自身にとっては「学習」と捉えていることである。このことは教育訓練を担当する者として極めて重要な確認すべき事のように思われる。

### 2.3. 問5 「学校へ行く目的」は何でしょうか？

この問への記述の分析も問4の分析と同様な方法で行った。結果的にはほぼ同様な言葉が記述されていたため、同じ分析枠組みで集計した。その結果が表6である。

この結果から、各「格」の第一位を連ねた労働者・国民にとっての「学校」とは

「人生を通じて社会の中で自分が団体生活での知識を集団で学ぶところ。」ということになる。

「団体生活」に次いで多いのは「社会に出る」であり、これらは共通した集団生活が意図されており、「学校」の意味は、「団体生活」が重要な概念のように思われる。

そして、「学校」の営みとしては、先の「教育」の概念と大差はないことが分かる。つまり、「知識を学ぶ」ことについては「教育」と同じであることである。このように「知識を学ぶこと」を「学校の目的」に記した人が多いことは、これらの点の意識が強く関連していると言うことであろう。

表6 「問5 貴方にとって学校に行く目的」

いつ	どこで		誰が		どのような		なにを		どのように		どうする	
	場所	137	自分	258	団体生活での	217	学問・知識・情報・漢字・文章	586	経験を通して	87	学ぶ・覚える・知る・勉強する・頭を働かす	945
将来・未来	社会・世界	132	親以外	15	多くの・広い	176	人付き合い・対話	434	ともに・集団で	83	形成する・身につける・得る・持つ・受ける	763
現在	学校	36	先生	7	人間としての	168	友人	292	専門的に	36	作る	262
その後・今後	職場	28	親が	6	社会にでる	168	自己のこと・身体	207	義務的に	28	向上する・鍛える・増す	238
大人	日常	14	社会	5	必要な・重要な	109	(?) 基本的なこと	188	一人で	19	生活する・生きる	214
常に	地域	8	先人	5	最低限の・していけない	66	能力・技能	178	きちんと	18	見つける	100
年齢に応じて	家庭	6	生徒	4	仕事を見つける	47	一般常識・教養・文化	141	やる気によって	15	行動する・活動する	92
子供に対して	国	2	国民	1	あたらしい	37	社会のルール・義務	122	一部分・一旦	13	準備する・基礎になる	90
成長に伴って					大切な	29	他人のこと	102	一応・普通	12	接する・ふれあう	85
必要に応じて					教科・教材	24	方法・手段	97	全て	12	伸ばす	82
					困難な・疑問な	20	生きるすべ・指針	82	より深く	12	役立つ	78
					個々の	16	個性・適正・興味・趣味	76	円満に	7	考える	68
					入口の・一歩	14	精神・心	69	効率よく	6	育てる	54
					より良い	13	生活上の態度・しつけ	56	論理的に	6	目的(教育の)	48
					将来の	9	もの(教育のこと)	52	活用して	5	教える	35
					なにか	9	学歴・資格	37	沿って	4	豊にする・充実する	34
					分かり易い	7	期間・時間	28	平等に	4	決める・判断する・解決する	26
					強制的に	7	可能性・創造性・光	18	自由に	3	応用する・適応する	26
					すすんで	5	物事	15	必ず	3	楽しむ	22
					真の	4	幅	13	必要な者が	3	達成する	20
					高度な	4	我慢・忍耐力	12	再び	3	大切に	16
					特異な	4	スポーツ・クラブ	11	社会の必要に	2	確認する	11
					過去	3	将来のこと	9	直接	2	自信を付ける	10
					知的	2	仕組み	9	総合的に	2	助ける	7
その他	その他	4	その他	1	その他	29	その他	78	その他	11	その他	97
総計		167		302		1187		2912		396		3423

「教育」が「学習」と理解されていることを考えれば、「学校」の役割が「教育」と同様な営みを期待しているとしても不思議ではないと言えよう。

2.4 - 1. 問6 「貴方は何歳まで働きたいと思いますか」

働きたいという希望年齢において、性別に比較して見たのが次の図25である。図のように全体的な傾向としては、男女とも65歳以上までの労働を希望していることについては差がないと言えよう。70歳以上の希望者は女性の方が低くなっているが、全体的傾向に及ぼすほどの影響は少ないと言える。

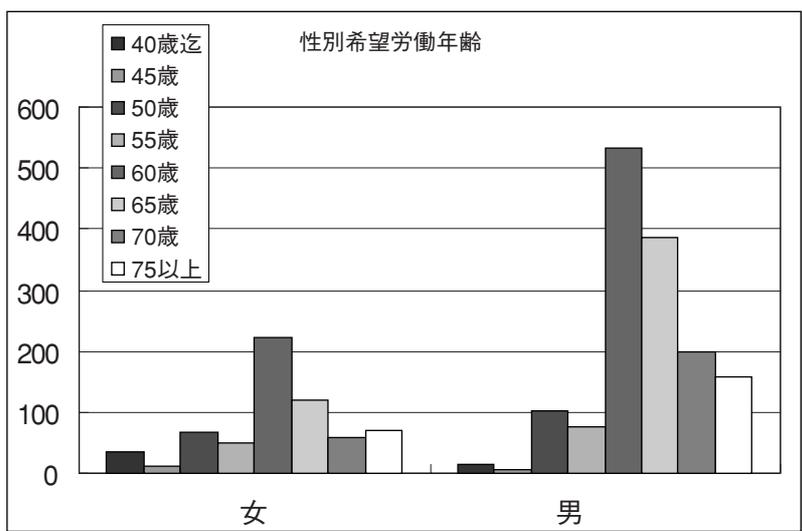


図25 男女別労働希望年齢

また、現在の年齢段階別に労働希望年齢を見たのが図26である。55歳以下の段階ではいずれも60歳まで働きたいと答えている者が最も多い。これに対し、60歳を過ぎた回答者は一段階上、すなわちさらに5歳上までの労働を希望していることが分かる。

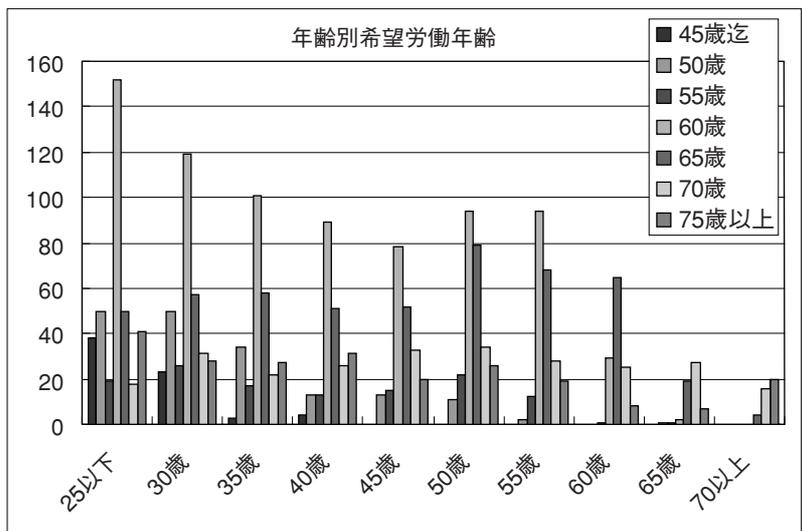


図26 年齢別希望労働年齢

希望労働年齢を学歴別に見たのが図27である。図のように学歴別には労働希望年齢には差がないことが分かる。

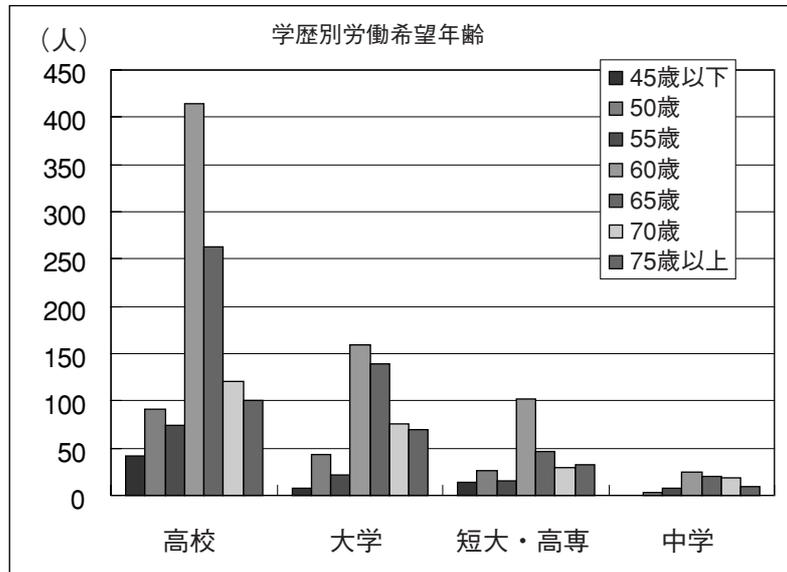


図27 学歴別労働希望年齢

2.4 - 2. 問6 「最後の時期の働く目的は何ですか」

この記述も自由なため、先ず言葉の整理から始めた。その目的を分類するとおおよそ5つになる。その5分類ごとの理由を記述した人数を集計したものが表7である。

表7 「問6 最後の時期の働く目的」

(豊かな)生活のため・維持	320	後輩の指導・育成・次世代への引継	165	生き甲斐・人間の目的	152	健康のため	141	働くこと	148
貯金・お金	211	(国民として)役に立ちたい	122	集大成・自己確認・人生のまとめ	140	活力・意欲維持	91	楽しみ・好きだから	36
老後のため	136	人間関係	53	充実感	85	ぼけ防止/思考力維持	73		
収入	74	ボランティア	32	社会に取り残されないため	81				
				趣味・関心	58				
				次(老後)のステップのため	44				
				知識欲・習得のため	34				
				夢の実現	16				
				(自分の)人間形成	14				
その他	3	その他	2	その他	18	その他	5	その他	6
「生活のため」	744	「後輩指導」	374	「生き甲斐」	642	「健康維持」	310	「趣味」	190

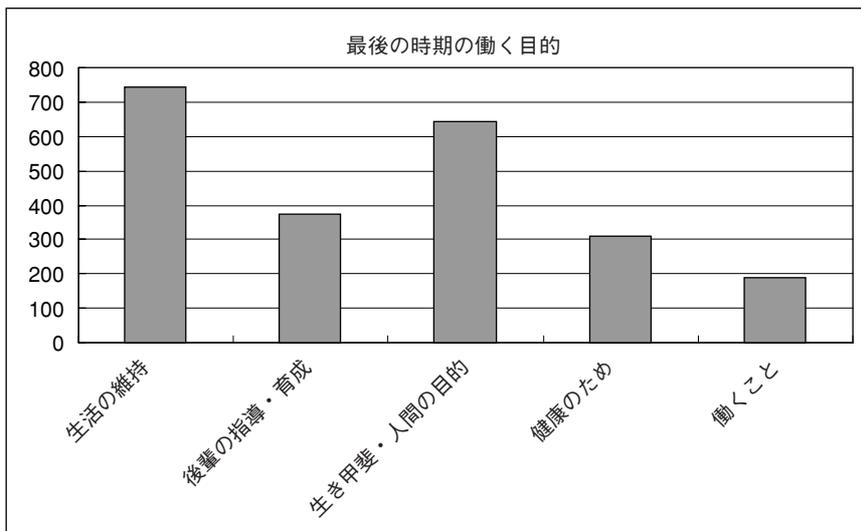


図28 最後の時期の働く目的

働く目的で最も多い回答は「生活の維持」であるが、次いで「生き甲斐・人間の目的」が高くなっている。「後輩の指導・人材育成・次世代への引継」も少なくなく、単に生活の維持為だけに働くと言うことではないといえよう。

### 第3節 自由記述に見る労働者の学校教育への失望と期待

本節ではアンケート用紙の最終ページへの記述を依頼した自由なご意見の記述内容を整理し、在職労働者が学校教育に対してどのような感想・意見を持っておられるかを簡単に紹介したい。記述された人は456人で、回答者の17%であった。このうち女性は183人、男性は264人、性別不明者が9名であった。

自由記述欄への記述された主要な意見を最終の資料に掲載している。目下、教育のあり方が議論されているが、声なき人の声として、教育を受け働いている労働者の意見として参考になるものが少なくない。

その特色として、最初に述べなければならないことは、アンケートの意図が極めてわかりにくかったという意見である。このことは第1章の研究の方法においても述べたように、本研究の意図を明確に述べなかったことに原因がある。それは、学校教育への批判を前提とした調査であることを悟られないように特に注意したためでもある。従って、次のような意見が寄せられている。

#### 3.1. 調査に対する期待

上のように調査の意図が不明確であるにもかかわらず、調査に対する強い期待も述べられている。それらの代表的意見は次の通りである。

○回答する項目が多く適切な判断ができませんでした。又、この調査から今後若い人達の

- 将来性を延ばす為に少しでも協力できたでしょうか？（39歳男性製造作業員）
- 何か統計でも出たら、県民だよりなどに公表して下さい。（36歳女性専門職）
  - このアンケートにより、学校の受験のあり方が変われば良いと思います。（42歳男性建設機械）

### 3.2. 学校教育に対する批判

回答者の学校教育への批判は次のように極めて強い感想が述べられている。

- 今回のアンケートで学校の勉強全てが仕事に役立つのか不思議に思いました。勉強そのものより、興味がある事を伸ばす方が大事なような気がします（多少の知識は必要ですが）。（33歳女性その他）
- 一般的な教養を身に付けたら、全員同じ教育ではなくそれぞれの能力や興味（やりたい事）に合わせたいろいろな方向へ学科があっても良いと思います。その様な場を持った専門学校が多く作られれば良いと思います。（40歳男性建設機械）

### 3.3. 学校教育の擁護

少ない意見ではあるが、次のような学校教育への擁護論もある。ただ、この種の意見の場合、何が意味があると考えているのかという点がやや不明確となっている。

### 3.4. 学校教育に対する期待

そして、アンケートに回答することによって、次のように学校時代の教育内容の問題を明確に意識することが出来たとする意見もある。

- 教育を知識の授受の手段としているところに現代の問題がある。知識を教えるのではなく、学び方、勉強の仕方を教えるべきである。（36歳男性製造作業員）
- 教育というのはただ学習するだけなのか。・何も教育だけがすべてではない。・社会に出てから役立つ術を教えてほしい。（24歳男性製造作業員）

### 3.5. 公共職業訓練に対する期待

また、調査対象者が在職者訓練の受講者であるために、アンケートの内容には直接的に関係ないが、次のような公共職業訓練への期待も記されている。

- 本センターの役割は大きいと思うので、広く声を聞いて有意義な講座をお願いします。（37歳男性専門職）
- この学校はととてもすばらしくて仲間もよくて充実したものでした。また機会があったら再度入りガンバリたいと思う。6カ月は短いので中高年のためにはもっとじっくりと取り組んでほしい。再就職めざしてガンバル力を出しています。（52歳女性専門職）

自由記述に記入された意見は、相対的に今日の学校教育への批判が多かった。先にも記したように、学校教育への批判を目的とした調査であることは全く触れていない。にもかかわらず学校教育へ批判が多いことは、職業訓練の受講者へのアンケートだったことによるかも知れないが、むしろ労働者の意識の実感が出ていると考えることができる。

また、生涯学習としての生涯職業能力開発の重要性についての期待が高いということも特徴といえよう。